

2014 年度 神戸学院大学 人文学部
研究推進費 研究成果報告書

**学修支援の教育方法としての e ポートフォリオの
教育的効果に関する実験研究**

2015 年 3 月

神戸学院大学 人文学部
立田慶裕

学修支援の教育方法としての e ポートフォリオの 教育的効果に関する実験研究

目 次

第 1 章 研究の概要

- (1) 研究の背景
- (2) 目的と特色
- (3) 計画と方法

第 2 章 e ポートフォリオシステムの教育的効果

- (1) e ポートフォリオの目的と種類、および教育効果
- (2) 多様な e ポートフォリオの活用事例

第 3 章 実験研究の展開と成果

- (1) 入門演習の目標と計画
- (2) 研究の展開
- (3) 今後の研究課題

資料 1 manaba に関するアンケート結果

第 1 章 研究の概要

(1)研究の背景

1) **研究経過:**e ポートフォリオ・システムとは、紙媒体ではなく電子ポートフォリオあるいはデジタル・ポートフォリオとも呼ばれ、インターネットのウェブ上で利用者によって集められ、作成され、管理される電子的なエビデンス(根拠となる資料)の集合体である。このシステムは、eLearning の一つの形態ではあるが、教師用の e ポートフォリオだけではなく、学習者自身も自分の学習成果を蓄積することによって、学習の振り返りやキャリア教育に利用できる電子上の履歴システムである。その点で、従来の教材の提示やレポート提出のみに特化した eLearning システムとは一線を画する。その教育的利用については、日本でも 200 以上の大学で採用され、多様な教育目的に活用されている。また、e ポートフォリオは、米国、英国、オーストラリア、オランダ、フランス、フィンランドなど国際的にも多くの国々の高等教育、中等教育で採用されている。

代表者は、昨年度まで、富山大学および富山インターネット市民塾との共同で、大学および生涯学習における e ポートフォリオ・システムの可能性に関する開発研究を行うとともに、その成果を国際学会で発表してきた。また、海外および国内における多くの e ポートフォリオ システムの事例についての研究を進めてきた。

2) 研究成果等との関連および準備状況

本研究の代表者は、その成果として、2011 年から 2013 年にわたり、『文部科学教育通信』において、「大学と社会を結ぶ e ポートフォリオ」として 42 回にわたって共同研究者とともに発表を行ってきた。また、同誌においては、2013 年 5 月より「学習支援の教育方法」として大学の教育方法としての学習支援のあり方についても発表を行ってきた。本研究は、その先行研究を踏まえ、代表者が所属する大学の授業において、実験的な研究として行うものである。

(2)目的と効果

A.研究の目的

本研究では上記の研究成果を活用し、神戸学院大学人文学部生(立田ゼミ生 18名)を対象として、4年間にわたる学習支援を行う上で、eポートフォリオがどのように活用できるか、その教育的効果を実験的に分析することを目的とする。その活用の目的は、

- ① 学習の基本的な支援、
- ② 形成的フィードバックを含む総括的評価
- ③ 学習者自身の学習履歴の蓄積とキャリア教育への活用
に置く。

ただし、研究年度が1年間のため、本研究では、

- ④ 初年次教育における教育的効果を検討する。また、人文学部の学習者においては、教職課程履修者も多くみられるので、
- ⑤ 教職課程履修者のための可能性についても検討する。

B. 研究の学術的な特色と予想される結果

1) 研究の特色と予想される結果は、次のようになる。

①本学では、現代社会学部に manaba フォリオが導入されている。その目的は、現代社会学部の教育目的に沿っているのに対し、人文学部の学習者にとっての e ポートフォリオの意義を明らかにする。②学習者の履歴形成が学習者に及ぼす自己啓発の効果を明らかにする。同時に、③学習者のプレゼンテーション能力の向上、④ゼミ学生の相互交流の促進、等の学習支援の方法を導入することで得られる実験的な量的、質的データは、本学における e ポートフォリオの教育的効果についての独創的な研究となる。

2) 予想される結果と社会的意義

学生自身による学習を基盤としたシステムでありながら、学習支援の基盤的システムとなる点、表現力や文章力を含む多様な評価を詳細に行えるシステムである点、キャリア開発に向けた履歴システムである点、学生間の相互交流をもたらす点という4つの特色は、eポートフォリオの重要な機能とされている。これらが、人文学部の学生において、どのような特色ある効果をもたらすかが予想され

る結果となる。上記の点を含めて、現代社会学部における e ポートフォリオ活用との比較検討も行うことは、本学の教育と研究の両面を推進できる重要な意義を持つ。

(3)計画と方法

本研究では、e ポートフォリオの代表的なシステムである朝日ネットの **manaba** フォリオの導入を予定している。(manaba 選択の理由は、活用事例が海外、国内とも多く、学習支援の教育方法開発のためにきわめて参考になる事例が多いこと、また、現代社会学部との比較を行うことができる点にある)

そこで、前期末より、導入を試み、夏期休業期間、冬期休業期間における学習者の学習を含めて、10 ヶ月の利用を行い、その実験結果を年度末にまとめる。

研究計画と方法

- 8 月 e ポートフォリオの導入、
- 9 月 学習課題の達成と評価
- 9～1 月 授業期間における学習への活用
- 12 月 冬期休業期間における課題提示
 - 冬期休業期間における人文入門演習の課題提示
 - e ポートフォリオに蓄積した学習成果に基づく
 - 自己ショーケースの作成、学習課題の達成
- 1 月 学習課題の評価
- 2 月 キャリアデザインのためのレポート作成
- 3 月 e ポートフォリオデータの分析と考察、報告の作成

第2章 eポートフォリオシステムの教育的効果

(1) eポートフォリオの導入の動向

本実験研究では、eポートフォリオを学修支援ツールとして用いるが、文部科学省からの推奨による一方、すでに多くの大学で、eポートフォリオとは、学習支援のツールとして用いられている。まずは、eポートフォリオが持つ教育的効果について、これまでどのように考えられているかを検討することにしたい。

平成24年の中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」では、アクティブ・ラーニングとともに、学生が主体的な学習へと動機づけられると同時に、学生が自らの学習を自己評価し、その到達度を確認する「学修ポートフォリオ」の必要性が述べられている。

【学修ポートフォリオ】「学生が、学修過程ならびに各種の学修成果(例えば、学修目標・学修計画表とチェックシート、課題達成のために収集した資料や遂行状況、レポート、成績単位取得表など)を長期にわたって収集し、記録したものの。それらを必要に応じて系統的に選択し、学修過程を含めて到達度を評価し、次に取り組むべき課題をみつけてステップアップを図るという、学生自身の自己省察を可能とすることにより、自律的な学修をより深化させることを目的とする。従来の到達度評価では測定できない個人能力の質的評価を行うことが意図されているとともに、教員や大学が、組織としての教育の成果を評価する場合にも利用される」(同答申、用語集、38頁)

本研究で用いる朝日ネットのeポートフォリオ、manabaもこうした効果を持つものとして開発されてきている。朝日ネットの説明によれば、開発当初は、manabaコースとmanabaフォリオは別のLMSとして開発されていたが、最近では、manabaコースにもmanabaフォリオの機能が加わっている。コースが全学

向けの教育支援システムとして位置づけられているのに対し、フォリオの方は、実習や研修のための e ポートフォリオシステムとして位置づけられている。

現在、同社のシステムでは、そのコースにおいて、小テスト、e ポートフォリオ、プロジェクト学習、レポートの相互閲覧や個別指導、鋼材配布、スマートフォン対応、掲示板、出席・リアルタイムアンケートといった機能が提供されている。また、教務の電子システムとの連携も図られ、シラバスや学内システムとの連携も図られている。

manaba フォリオでは、教育実習や留学支援、キャリア支援、企業研修などでの活用が行われている。

また、最近、教育講座や教育教材として、両サービスで利用できるコンテンツの開発が進められ、英語ライティング講座やネットのマナーとルール講座などの提供が行われ始めた。

ただ、他大学の例では、自主的に mahara といったシステムを用いて独自で開発する例もあれば、他の e ポートフォリオシステムを導入している事例もある。まず、こうした各種の e ポートフォリオに共通する教育効果について、考察することにした。

(2)e ポートフォリオの目的と種類

①e ポートフォリオの目的

e ポートフォリオは、紙媒体ではなく電子ポートフォリオあるいはデジタル・ポートフォリオとも呼ばれ、インターネットのウェブ上で利用者によって集められたり、作成され、管理される電子的なエビデンス(根拠となる資料)の集合体である。『e ポートフォリオ：学生指導の新たな機会』を著したガリスは、この e ポートフォリオが英国、オーストラリア、オランダ、フランス、フィンランドなど国際的にも多くの国々で採用されつつあるという。彼によれば、このシステムには、その初歩的な目的として次の 3 つの種類があるという。

②学習を基盤としたシステム

第一は、学習を基盤としたシステムである。

利用者の学習を支援するシステムとして最も多く用いられているタイプである。その内容は、雇用のためのアプリケーションというよりは、むしろ自分が行ってきたことのふり返りを通じて学ぶ機会を提供しようというものである。

学習支援を主とするシステムでは、授業への意見や感想といった記録に加えて、自分が制作した作品や音楽、日記によるストーリーテリング、知識の収集と整理を通じて、学習者自身のふり返りが日常的にできるような構造になっている。日常的な記録を中心として累積した情報や知識を整理しながら、知識の活用や新たな作品の制作、知識の創造に向けての学習を支援するという機能が重要であり、成果よりはプロセスが重視される。

このシステムの場合は、固定的なフォーマットよりは、柔軟な書き込みができたり、多様な素材の記録と整理、新たな知識の創造ができ、個人の特徴がはっきりと引き出されるような機能が重視される。EIFEL の会議でお会いしたヘレン・バレットさんは、1990 年代より e ポートフォリオの研究を展開し、生涯学習の視点から、この学習を基盤としたシステムは制度的というよりは個人的なウェブが中心であり、「ふり返り」機能こそがその要であるという。

③評価を基盤としたシステム

第2は、アセスメントの機能を重視するシステムである。

このシステムでは、学習活動だけではなく、学校や社会での活動、集めた単位や資格などを含めた学習者の「総括的な評価」、アウトカムを評価する。学習支援システムが個人によって運営される割合が高いとすれば、こちらは、むしろそうした学習者を管理し、支援する教師や学校といった制度側が運営するシステムである。

学習支援システムが形成的（フォーマティブ）で自己評価的であるとすれば、評価システムは、総括的（サマティブ）な性格を持つといえよう。しかし、そこに反省的な要素がないかというところではなく、学生たちの学習活動の成果の状況を制度的にふり返るという機能を持っている。学校の組織的なポートフォリオとして、教育や学習の活動とデータを集め、分析して、教育活動のエビデンスを収集することで、説明責任を果たそうとする役割も持っている。

学生が用いるポートフォリオとの相互的な活動の中で、客観的に学生の行った学習成果を相対的にあるいは絶対的に、あるいは個別に評価していく。そうした

支援を通じて、学部や教務委員会、学生指導の効果を発揮し、大学としての資格認定を行うのである。

米国のミシガン州のカラマズーカレッジのeポートフォリオの例をみよう。この大学は、19世紀初頭より続く伝統的リベラルアーツカレッジだが、多文化教育を通じた国際理解を重要な教育目標としている。大学の初年次にオリエンテーションで大学のカリキュラムである「Kプラン」と、ポートフォリオの使い方の説明を受ける。そこに、高校での経験を記入しながら、カレッジで自分が学ぶべき目標を論文として書いていく。そして、2年次、3年次の学習で外国調査による学習や、問いかけを自分のプロジェクトとして実行し、最終年度には、他の4年生との人間関係を築き、大学同窓生としての基礎を作って、社会に向けた自分なりのポートフォリオ、自分のスキルや力を明らかにしていく。

③キャリア教育と履歴のシステム

そして、第3に、大学卒業後のキャリアとつながるシステムである。

大学時代を通じて学び、活動したことを自分なりに整理し、社会に出てからの活動へとつなげていくためには、学生にとっての学習システムでも、大学にとっての評価システムでもない、もう一つの機能が重要となってくる。それが、キャリア発達を基盤としたeポートフォリオシステムである。学習活動と評価活動の結果得られていく資格や学習履歴、活動履歴を社会に向けて自己をPRするために用いるのである。

いわば、学生が自らを社会に売り込むショーケースとして機能する。入学当初から、自分の進むべき道を考え、高校から大学時代の学習や経験を社会に出ても積み重ねていくような方向性を考える場でもある。その意味で、単に大学時代にポートフォリオの利用が終わるのではなく、キャリア発達のプロセスは、大学のアウトカムだけにはとどまらなくなる。素材としての学術成果や得た単位、自分が書いた論文や作った作品、読んだ本のデータベース、継続的な訓練経験から培われたスキル、社会活動の経験、研究やボランティア、インターンシップ、旅行を通じて得た大学や社会的人脈、こうした学生時代の資産を社会でも活用し、生涯にわたるポートフォリオとしていくことが求められるのである。

この3つの機能を持ったシステムはそれぞれが別のものであるというよりは、多くの大学において、統合的なシステムとして運営されている。ただ、どの機能が重視されるかで多様な類型が生まれてくるのである。

(2) e ポートフォリオのデザインと機能

システムのデザイン

ポートフォリオには、利用者の学習を支援する学習基盤システム、学習成果の評価と認定のシステム、キャリア教育と履歴を中心としたシステムという大きく3つの種類があると述べた。ただし、この3つは、別々の機能として考えられているだけであり、実際の運用に際しては、これらを一つの統合化したシステムとして利用できる。

こうした機能を含めた上で、ポートフォリオのシステムを開発し活用していくには、システムの設計について、多くの研究課題が生じてくる。システムの運営担当者は誰か、また、利用者として、大学生だけではなく、教員や職員を設定していくかどうか。学生やスタッフのアクセス権をどうするか。ポートフォリオにどのようなメディアの機能を加えるか。学生たちはポートフォリオをどのように使うのか。その使用状況に応じて、ポートフォリオに蓄積された学術記録や活動記録をどう大学として公的に認定するか。ポートフォリオの内容のどこまでを公的に公開していくか。当然その場合に生じるセキュリティやプライバシーの保護をどう保証するかといった課題が生まれる。

システムの選択肢

実際のポートフォリオのシステムを見ていくと、一見、学生が同じようにコンピュータ・ディスプレイに向かってポートフォリオを利用しているとしても、その設計デザインは、大学によって非常に多様なものがあることを今後の連載の中で示していくことにしたい。

たとえば、ガリスは、多くの大学の例をみながら、現在のポートフォリオのデザインや機能には、その設計思想や機能の項目によって、表に示したような選択肢を持つ可能性があり、どのようにポートフォリオを位置づけるかの設計によって、ポートフォリオ利用の目的や機能が大きく異なってくるという。

表 e ポートフォリオのデザイン（設計項目とオプション）

	設計項目	オプション	
1	利用者ベース	学生中心	機関中心
2	単位ベース	活動中心	成績中心
3	開発者	機関独自	民間ベンダー
4	構造	構造固定形式	柔軟でプロセス中心
5	利用法	選択利用	必須利用
6	制作バージョン	多様なバージョン	シングルバージョン
7	アクセス管理	学生による管理	機関による管理
8	ふり返し学習	全レベルでふり返し	なし
9	アセスメント	アセスメントアプリ含む	なし
10	ショーケース機能と就業支援	就業支援、ショーケース機能あり	就業支援なし
11	キャリア発達	発達過程ツール	成果志向ツール
12	生涯支援	生涯利用可	一時的利用
13	利用者負担	無料	利用者負担ベース
14	制度費用	フリー・オープン	ライセンス料
15	利用費	自由利用	登録料ベース
16	制度的統合	大学DBへ統合	無印
17	ID	機関ID	利用者ID
18	スタッフ支援	中央管理	分権的支援

たとえば、1の「利用者ベース」では、ポートフォリオという電子文書をどこまで公的な書類とできるか、あるいは公的書類として承認していくかという問題がある。2の「単位ベース」では、大学内のどの単位まで責任を取るべきか。社会活動を単位として認定する場合もあれば、学術的な成績を中心とする場合もある。

3の「開発者」は、誰がシステムを開発するか。大学が独自に開発したシステムを使用する場合もあれば、民間ベンダーの開発したシステムの導入もありうる。4の「構造」は、ポートフォリオのデザインや内容を利用者がどの程度自由に変更できるかという点である。また、5の「利用法」は、大学、学部、学科といったユーザーにより求められる利用法が異なってくる。それぞれの要求をどうポートフォリオに反映できるかという点である。6の「制作バージョン」は、利用者や大学により変更可能なバージョン数。ユーザーや大学が制作していくバージョンは、必ずしも一つに限らず、学部や学科によってまったく異なったものが利用されている場合がある。

そして、7の「アクセス管理」は、実際に多くの利用者が学生であっても、ポートフォリオにアクセスできる管理者は学生に限られず、教員やシステムスタッフにも学生のレポート等へのアクセス権が与えられるかもしれない。

さらに、実際の利用に当たっては、8の「ふり返り学習」では、学生がどの程度の頻度でポートフォリオを利用し、書き込んでいくか。また、教員や相談員が学生の学習をどのようにまたどの程度の頻度で指導を行っていくかという問題もある。これに対して、9の「アセスメント」では、学習成果のアセスメントや大学の教育評価の支援としてどのようなアプリを利用し設計するか、という問題がある。これは、ポートフォリオが単に学生の評価だけにとどまらず、組織としての評価システムとして機能する場合も考えられるからである。

10の「ショーケース機能と就業支援」は、大学生や大学院生の就活や職業的活用を支援するものとしてどれだけ活用できるか、である。大学生が就活していく段階で、それまでに書いた論文や成績、職業希望、大学生活での活動記録そのものを企業側に示す。キャリア支援センターが個別の学生のポートフォリオをみながら、その学生への適切な就業支援を行う。そうした就業支援にいたるまでも、11の「キャリア発達」として、大学在学中から、学生の発達や職業的成熟を支援し、利用者のキャリア計画を促進できるような設計を考えていく必要がある。さらに発展的には、12の「生涯支援」として、卒業生にもこのサービスを提供し、卒業後もアクセスできるようにすることで、卒業後の生涯学習やキャリア発達を支援できるような機能があれば望ましい。

また、このシステムの経済的基盤を考えると、13の「利用者負担」の問題がある。アクセスや利用に関連して利用料金を設けるべきかどうか。14の「制度費用」として、システムの保証のための費用や料金を大学がどの程度負担すべきか。民

間委託の場合はライセンス料をどうすべきか。15の「利用費」では、ハードな利用者や入門的な利用者といったレベルにより、登録料や利用費を段階的に設定する一方で、全くの無料という方策もありうる。16の制度的統合では、学生のポートフォリオと大学のデータベースのリンクを貼るとすれば、つないだ場合の管理費をどうするかが問題となる。

費用面だけではなく、大学の広報やスタッフ育成も重要となる。17の「ID」は、大学のカラーやロゴなどをポートフォリオに入れたりして大学のIDを強調していくか、逆に利用者のIDを尊重して利用者独自の画面を作れるようにする。18の「スタッフ支援」は、以上のシステムを運営するにあたって、大学の設計スタッフにどの程度管理責任を与えるかという問題であると同時に、このシステムを専門的に運用できるような学部、学生相談員、ゼミ指導者、技術スタッフ、キャリアサービスなどの支援をどうするかという課題である。

しかし、こうしたeポートフォリオ設計の課題を解決しつつ、現在では、さらにeポートフォリオの開発が進められている。また、各大学は、既成のeポートフォリオであってもその機能の教育的効果の実証されていることから、日本だけではなく、欧米の各大学でその採用が進んでいるのである。

本研究でも、既成のeポートフォリオではあるが、日本の多くの大学で採用されているeポートフォリオシステムとして、manabaを活用することで、その教育的効果を確かめていくことにしたい。manabaを選択した理由は、特に、近年大学の授業で採用が進められているアクティブラーニングの一種として、プロジェクトベース型の学習が可能な機能を有しているからである。

参考文献

立田慶裕(2011)「eポートフォリオの目的と種類」『文部科学教育通信』ジアース教育新社、No275、22-23頁

立田慶裕(2011)「多様なデザインの可能性」『文部科学教育通信』ジアース教育新社、No276、22-23頁

Garis, Jeff W., 2007, "e-Portfolios: Emerging Opportunities for Student Affairs", Jossey-Bass
Barret, H., 2006, 'Electronic Portfolio and Digital Storytelling for Lifelong and Life Wide Learning' retrieved August, 22, from
http://my-ecoach.com/modules/custombuilder/popup_printable.php?id=10310

第3章 実験研究の展開と成果

(1) 入門演習の目標と計画

本実験研究では、eポートフォリオを1年生を対象とした人文入門演習の講義で行う。推進研究が決定する以前に計画していた人文入門演習の目標は、下記の通りであった。

講義の主題：学習のスキルは、大学にとどまらず、卒業後の人生のいろんな場面で役立ちます。とりわけ、読む力と書く力は、自分の力が高まるだけでなく、人生を楽しいものにしてくれます。本講では、最初に、本や映画、写真を読むことの楽しさを知り、書くことを通じて自分を深めることを目的とします。

目標：(1)読解力と文章力のパワーアップを図る。(2)ジャンルを越えた情報力を習得する。(3)レポート作成スキルの向上を図る。

一方、推進研究では、①学習の基本的な支援、②形成的フィードバックを含む総括的評価、③学習者自身の学習履歴の蓄積とキャリア教育への活用としている。

とりわけ、人文学部の受講者の中には、教職課程希望者もいることから、さらに、④初年次教育における教育的効果、教職課程履修者のための可能性についても検討する、という研究計画目標をたてている。

したがって、この研究の目標としては、

- ① 学習の基本的な支援という点で、文章力のパワーアップと情報の力に重点をおきながら、多様な学習法を用いる。
- ② キャリアデザインの形成を目指して、実質、各学生の関心を喚起するためのレポートの相互閲覧による受講者同士の形成的フィードバックを行う。
- ③ 教職課程のニーズ把握を行う。

この3点を具体的な目標に、eポートフォリオを活用して行うこととした。

(2)実験研究の展開

当初の研究計画日程に沿って、実験を行った研究内容は、次の5点である。

- ①e ポートフォリオの利用法に関する学習とプロジェクト学習
- ②情報活用力の向上のための学習
- ③キャリアデザインの形成のためレポートの相互閲覧
- ④e ポートフォリオに関するアンケートの実施
- ⑤教職課程で改善を望む点

①e ポートフォリオの利用法に関する学習とプロジェクト学習

e ポートフォリオの利用にあたっては、まず、朝日ネットの担当者に来ていただき、システムの利用の説明を研究代表者が受講し、同時に、PBL 教材として、グループディスカッションのコンテンツを提供してもらった。

その教材を用いて行った次のようなプロジェクト学習を実践しながら、受講者に e ポートフォリオの利用法を学んでもらった。

【仮想テーマについてのディスカッション・トレーニング】

1. グループディスカッションしていただきます（制限時間は5分です）

今もなお続く「きのこたけのこ戦争」について、これから皆さんに議論していただきます。

きのこ派、たけのこ派に分かれてそれぞれの良さを、まずは自分たちのグループの中で出来るだけ多く意見を記載してください。

※「自分はきのこ派だけどたけのこ派のグループに登録されている」という方も今回はグループの立場になって考えてみてください。

2. 他のグループの意見を見てみましょう。（所要時間5分程度です）

3. 最終的に自分はどちらが好きか添付されたファイルに記入して提出してください。

（所要時間5分程度）

※誰が正解という答えはありませんので自由に意見を書き込んでください。

提出方法について

提出時間になったら添付されたワードファイルをダウンロードし、上書き保存しmanabaへ提出してください。

(注) きのこたけのこ戦争とは

きのこたけのこ戦争とは、1980年から現在にかけて、チョコレート分離主義・ハンマー族・ビスケット派を中心とするきのこの山陣営と、チョコレート混合主義・ドリル族・クッキー派を中心とするたけのこの里陣営との間で戦われている日本国最大級の内戦。1979年にたけのこの里が発足して以来、翌80年頃から小規模な派閥戦争が国内各地で頻発していたが、21世紀前後のインターネット普及により、戦火は瞬く間に日本全土へと拡大した。

この課題の実施のために、受講者をキノコ派1，キノコ派2，タケノコ派1、タケノコ派2の4つのチームに分けてディスカッションを行ってもらった。その結果として、各受講者から、好きな理由を作文して、レポートとして提出してもらった。

②情報活用力の向上のための学習

さらに、どの程度の情報活用力を受講者が有しているかを判断するために、eポートフォリオのアンケート機能を利用した。その結果が次のようなものである。

ワードについては、ほとんどの受講者が利用できるが、パワーポイントは時々使い方がわからないものやまったく知らないものが半数近くいる。しかし、本講義は情報処理すべてを学ぶことが目的ではないので、とりあえずは、ワードを使うような講義内容を中心として、レポートを書くことができるという大きな目標を置くこととした。

※情報活用に関するアンケート

みなさんは、高校である程度のコンピュータソフトの使い方を学んでこられたと思いますが、自分がどの程度使えるか、お尋ねします。

問1 ワードは自由に使えますか。

1 まあ使える	2	16.7%
2 ある程度は使える	7	58.3%

3 ふつう	1	8.3%
4 時々使い方がわからない	2	16.7%
5 まったく使い方を知らない	0	0.0%
	12	100.0%

問2 パワーポイントは自由に使えますか。

1 まあ使える	1	8.3%
2 ある程度は使える	3	25.0%
3 ふつう	2	16.7%
4 時々使い方がわからない	5	41.7%
5 まったく使い方を知らない	1	8.3%
	12	100.0%

問3 ウィンドウズ・メディア・プレイヤーは自由に使えますか。

1 まあ使える	0	0.0%
2 ある程度は使える	2	16.7%
3 ふつう	1	8.3%
4 時々使い方がわからない	4	33.3%
5 まったく使い方を知らない	5	41.7%
	12	100.0%

ただし、情報を収集したり、実際に活用するにあたっては、基本的な情報活用上のルール、とりわけ、e ポートフォリオでは、ネットを活用するため、そのための特別講座「ネット上のルールとマナーの学習」が朝日ネットで用意されているので、その講座の教材を購入の上、実施し、情報倫理の学習とテストを受けてもらうこととした。

③ キャリアデザインの形成のためレポートの相互閲覧

特に、重点を置いて指導したのが、受講者の動機付けのために、キャリアデザインを志向した講義内容と、レポートの学生同士の相互閲覧機能である。レポートを一度出すだけでなく、他の学生のレポートを参考とすることで、自分のレ

ポートの質をいっそう高めていくことができる。

そのために、行った課題が、自分の関心にそったエッセイの作成と、特別講義のインタビューの感想文の提出である。

1) エッセイの作成

エッセイを作成する目的は、学習への動機づけと同時に、学生自身の文章力や構成力をアップすることである。まず、レポートやエッセイを書く手順に関する講義を行い、どのようにしてレポートやエッセイを書くかを指導した。

レポートを書く手順

- 1, 話題やテーマを決める：話題やテーマを絞る
- 2, 主題文を書く： レポートの内容の概要を書く
- 3, 参考文献を集める： 文献のデータベースを作る
- 4, アウトラインの案を作る： いろいろな文献を参考にして（レジメや要約にまとめる）、テーマについてどのようにまとめるかを論理的に書く
- 5, ノートを作る： 考えたアイデア、文章、キーワード、作業日誌を片っ端から記録する。 インタビュー記録のデータや関連統計の出所を書く。
- 6, 決定版のアウトラインを作る：レポートの構成となるアウトラインを書く。
- 7, アウトラインに沿って文章を書く
- 8, まとめの考察と文献、注を書く

その上で、下記のレポート課題を課した。卒論になると、400 字でも 50 枚、20000 字の執筆を行う必要がある。そのためのステップとして、ここでは、3000 字の課題を課した。ただ、内容は自由であるが、3 回に分けて書かねばならないため、ストーリーの構成を行っていく必要がある。

レポート課題

みなさんが身近に関心をもつテーマを素材に 3 回連続のエッセイを書いてください。 1 回あたり 1000 字 ×3 回

各回にエッセイのタイトルをつけ、3 回目で一通り、読んで終わるような内容をお願いします。 エッセイをもってレポートに代えます。 3 つのワードファイルとして、提出してください。

締切は、1 月 16 日（金） 提出後の訂正も可能にしておきます。

実際に提出されたエッセイのテーマは、下記の通りとなった。内容は、一定の手順を踏み、ストーリー性を論理的に考えるものとなっていた。

表 各エッセイのテーマ

ディズニー
ゲーム
面白い題名
スポーツをすることによって身に付けたいもの
衆議院制度について
リンゴ
現代社会と税金
ふれあい
詰め込み教育とゆとり教育
黒田官兵衛
音楽の力
AKB48 について
人とのつながり
野球
マグロと食生活

2) 社会人へのインタビューとそのレポート

エッセイ提出と同時に、インタビューの経験を学生に提供した。

講義の一環として、大阪 NPO センターの堀野亘求氏を外部講師としてお願いし、「ソーシャルビジネスと NPO 活動」について、講義いただいた。本講義の内容は、受講者たちの将来にとって、どのような生き方があるか、自由なキャリアのありかたを示す内容のものであった。本講義についても、その結果を、インタビューの感想として、manaba 上にアップする課題とした。その結果からは、これまでに受講者たちが考えていた以上に、自由な生き方や新しい社会の動向があることを理解するとともに、多くの学生が感動を覚えていた。

④e ポートフォリオに関するアンケートの実施

最後に、e ポートフォリオシステムの利用に関する評価を行うため、e ポートフォリオ上でアンケートを実施した。結果をみるかぎり、e ポートフォリオの全体的な使いやすさは8割を超えている。また、レポートの提出機能よりは、プロジェクト機能の使いやすさの方が高いという結果となった。この結果は、資料1として示した。

また、「今後も manaba のような e ポートフォリオを使いたいのか」に関する自由記述の結果は、次のようになった。

そう思う。
はい、思います。ほかの先生のゼミでも、何か課題を出すとき、何か連絡をしたいときに気軽に使えるものとしてあってほしいなと思います。
意見交換ができるため、教職課程で使ってみたいと思う。
シンプルでいいので使ってみたいです。
グループワーク等で使ってみたいと思う。
使いやすい点が多いので使ってみたいと思います。
あれば便利だと思うし使ってみたいと思う。

⑤教職課程で改善を望む点

まだ、教職課程を取ると明確に決めている学生が少なかったため、この質問に対する回答は、次の1点だけであった。

「1・教職課程を取ろうか、取らないか悩む新入生のために「新入生なんでも案内」みたいなお話しができる場所づくり。

2・I 先生が「中学・社会科学習指導案の作り方の例」を作っていたように、他科目の学習指導案例というものがあってほしい。

3・教職課程専用の掲示板。すでに募集の終わったもの。期限が過ぎたものの掲示ははずしてほしいです。」

(3)今後の研究課題

本研究は、あくまで実験研究であり、本格的な実証的研究とはなっていない。

対象者が少数のゼミ受講者であるため、その結果から統計的な判断を下すこともできない。それでも、eポートフォリオの活用は、講義、PBL 学習、授業内アンケート、ディスカッション、インタビュー学習や、随時のレポート提出などの場面において、受講者にとって多様な学習の支援ツールとして役立つことが明らかである。

他方、この実験的研究を通じて次のような課題が浮上してくる。

- 1) 本推進費では、国立教育政策研究所の情報専門家への聞き取り調査や、eポートフォリオを運用している朝日ネットへの聞き取り調査も行っている。その結果の詳細は、本報告で論じることができなかったが、eポートフォリオの機能は日々進化していることが専門家からの情報収集でわかってきた。そうした進化する機能にはリアルタイムアンケートの機能があるし、各種のeポートフォリオ用の教材を用いることでさらなる学習支援が可能となる。
- 2) 本講義の期間が半年間であり、その内容をリテラシーの向上、とりわけ、レポートやエッセイなど「書く力」に重点をおくことで内容的には精一杯であった。実際には、ICTを活用した視聴覚教材の作成や学習などが、通年授業ではさらに実践できる。
- 3) 学生の学修支援にあたっては、受講者の学生がどのような学習ニーズをもっているかによって、利用できる教材やツールが変化する。適性処遇相互作用といわれる学習上の課題に対応するためには、できるだけ、事前に受講者の学習ニーズを把握することが望ましい。本実験研究が行われた人文入門演習は、どのように多様な人文学的内容であっても学べるような学習法の学習が目的とされている。この教育と学習のマネジメントの枠組みを導入した、学習支援の研究を今後は行っていく必要があるだろう。

資料 1

Manaba に関するアンケート結果

以下、manabaと教職履修に関する質問です。質問の回答そのものは成績に影響しませんので自由に書いてください。

(1)manabaに関する質問は、全5問です。

問1 manaba 全体の使いやすさはどうでしたか(選択必須)

1. 非常に使いやすい	1	14.3%
2. まあまあ使いやすい	5	71.4%
3. ふつう	1	14.3%
4. 少し使いにくい	0	0.0%
5. とても使いにくい	0	0.0%
	7	100.0%

問2 「アンケート」の使いやすさはどうでしたか？(選択必須)

1. 非常に使いやすい	2	28.6%
2. まあまあ使いやすい	3	42.9%
3. ふつう	1	14.3%
4. 少し使いにくい	1	14.3%
5. とても使いにくい	0	0.0%
	7	100.0%

問3 「レポート」の使いやすさはどうでしたか？(選択必須)

1 非常に使いやすい	1	14.3%
2 まあまあ使いやすい	2	28.6%
3 ふつう	4	57.1%
4 少し使いにくい	0	0.0%
5 とても使いにくい	0	0.0%
	7	100.0%

問4 「プロジェクト」の使いやすさはどうでしたか？(選択必須)

1 非常に使いやすい	1	14.3%
2 まあまあ使いやすい	5	71.4%
3 ふつう	1	14.3%
4 少し使いにくい	0	0.0%
5 とても使いにくい	0	0.0%
	7	100.0%

問5 今後も教職課程や他の授業で使ってみたいと思われますか？

(100字以内で自由に意見を書いてください) (入力必須)

(2)教職課程に関する質問です。

問1 現在の教職課程の履修に当たって、本学でもっと改善を望みたい点があれば、200字以内で自由に意見を書いてください。(入力必須)

問2 教職履修カルテと、教師力に関するエクセルファイルをダウンロードして記入の上、教職レポートとして提出してください。なお、履修の状況は、後期の単位の取得予定を含んでご記入ください。教職履修カルテのファイルは、アップロード後も、みなさんの履修に役立ちますので、しっかりと保存しておいてください。

2014 年度 神戸学院大学 人文学部 研究推進費 研究成果報告書

『学修支援の教育方法としての e ポートフォリオの
教育的効果に関する実験研究』

2015 年 3 月 13 日

著者 立田慶裕（神戸学院大学人文学部）

印刷 水山産業